

夫婦間での家事，育児の役割分担に関連する文献研究

Research of Literature on Division of Roles in Housework and Childcare
between Married Couples

漆野 裕子¹⁾，木村 知子²⁾

Yuko Urushino, Tomoko Kimura

キーワード 夫婦，家事，育児，役割分担

Key Words married couple, housework, childcare, division of roles

抄 録

目的 過去10年の夫婦の家事，育児の役割分担に関する先行研究から，この分野での研究の特徴と今後の課題を明らかにする。

方法 キーワードを「家事」「育児」「夫婦」検索エンジンとして，医中誌 Web 版と CiNii を用い，過去10年に発表された原著論文を検索した。最終的に抽出した23件の文献の夫婦の家事，育児の役割分担に関する研究動向と今後の課題について概観した。

結果 文献は，夫婦の家事，育児の役割分担の実態に関する研究（10件），父親（夫）を中心とした家事，育児の役割分担に関する研究（9件），母親（妻）を中心とした家事，育児の役割分担に関する研究（4件）の3つに分類された。

考察 家事，育児分担の現状や父親の意識については一定の研究成果があるため，その現状の詳細な分析が今後必要である。その際，夫と妻の自己評価・他者評価の違いがある可能性もあり，夫婦両方からの視点での研究を行っていくことで，夫婦間の相互評価の相違をなくしていく必要がある。

I. 諸 言

日本の父親が家事，育児を行う時間は国際的にも最低の水準にあることが様々な調査文献により明らかになっている。近年の第1子出産時の母親の平均年齢の上昇に伴う祖父母世代の高齢化により，育児支援が得られにくい現状がある。また，内閣府（2018）が成長戦略の一つとして女性活躍加速のための重点方針をあげ，社会における女性の活躍が重要視されている事から，仕事と家庭を両立する女性がさらに増加することが予測され，家事，育児に対して夫婦それぞれに役割を担う必要がある。子どもの誕生は，夫婦にとって大変大きな出来事であり，これを機にそれぞれの役割を調整していかなければならないが，2015年に発表された第5回全国家庭動向調査では，育児負担割合は母親79.8%，父親20.2%であったと報告されており，主として育児を担っているのは母親であり，母親が抱える負担はまだまだ大きい。周産

期の看護にとって，子どもを出産する夫婦が新しい家族を迎え，安定した家族関係を維持できるように援助することは重要な課題である。

2010年には，男性が積極的に育児に関わることができるよう，どのように父親が育児に関わるかのモデルを示し，育児方法の教育や啓蒙活動を行う政府主導の活動である「イクメンプロジェクト」が発足され，同年施行の改正育児休業，介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律では，男性労働者の育児休業取得を推進する制度が盛り込まれた（内閣府，2012）。しかし，寺見，南（2017）は，先行研究の分析から，父親の育児意識は変化してきているが，行動はあまり変化しておらず，その要因としては，いまだに社会が父親は働き手（家計）の中心であり，労働時間が長く，家事や育児に参画する時間的ゆとりがないことや育児休暇が取りにくいことなどと述べている。

今後家事，育児に対して夫婦それぞれに役割を

1) 聖泉大学看護学部看護学科 Faculty of Nursing, Seisen University

2) 聖泉大学看護学部看護学科 Faculty of Nursing, Seisen University

担うことは、母親の育児負担を軽減し、子どもが健やかに成長する上でも重要な課題である。そこで、過去10年の夫婦の家事、育児の役割分担に関する研究の特徴と今後の課題を明らかにしたい。

Ⅱ. 研究方法

1. 文献の選定

キーワードを「家事」「育児」「夫婦」検索エンジンとして、医学中央雑誌 Web 版（以下、医中誌 Web 版とする）と CiNii Articles（以下、CiNii とする）を用い、過去10年（2018～2009）に発表された原著論文を検索した。医中誌 Web 版では37件、CiNii では64件がヒットし、そのうち研究対象が大学生や、妊婦やそのパートナーであるなど、まだ子育てをしていない対象の家事、育児に対する意識のみを調査したもの、特定の職業や家庭環境など、対象を限定して研究している論文は除外した。それにより、CiNii では、13件、医中誌では13件が該当し（重複3件）、最終的に条件を満たす23文献を対象とした。

2. 分析方法

抽出した23件の文献を研究の概要と研究内容にしたがって分類した。次に、分類ごとに、研究対象やその背景、夫婦の家事、育児分担の現状や関連する要因に着目して精読した。文献を夫婦の家事、育児の役割分担に関する研究動向と今後の課題について概観した。

Ⅲ. 結果

1. 夫婦の家事、育児の役割分担に関する研究の動向

2009年から2018年（8月まで）の10年間に発表された夫婦の家事、育児の役割分担に関する研究は23件であった。年代別研究数をみると、2009年～2011年5件、2012年～2014年11件、2015年～2017年7件（2018年0件）と、継続して研究が行われていた。筆頭研究者を所属別にみると大学17名、専門学校2名、病院1名、家計経済研究所2名、NHK放送文化研究所1名であった。また、研究者の分野別では、看護学7名、児童学（保育含む）3名、文学2名、教育学2名、保健学2名の他社会学等、分野は多方面にわたっていた。調

査対象者は、夫婦14件、父親のみ5件、母親のみ2件、文献2件であった。研究方法は、量的研究（質問紙調査法）18件、質的研究（面接法）2件、文献研究2件、事例研究1件であった。

夫婦の家事、育児の役割分担に関する研究の動向と課題について抽出された文献を概観した結果、3つの視点が得られた。一つ目は、家事、育児の役割分担の実態に関する研究であり、現状としてどのように夫婦で家事、育児の役割分担を行っているのかについて研究されていた。その中でも、共働き夫婦を対象に家事、育児の役割分担を研究したものや、研究対象者のもつ子どもの年齢を1歳児や2歳児に限定して研究したもの等、夫婦の就業や子どもの年齢による特徴について明らかにしていた。二つ目は、父親（夫）を中心として研究されたものであり、家事、育児の現状にとどまらず父親の家事・育児の役割分担に対する意識や、父親役割受容との関連、父親自身のQOLについて明らかにしていた。三つ目は、母親（妻）を中心として研究されたものであり、夫の家事、育児負担への妻の評価に影響する因子の分析や、父親の育児行動と母親の育児負担感や育児ストレスとの関連などが明らかにされていた。

2. 研究内容

1) 夫婦の家事、育児の役割分担の実態に関する研究（表1）

家事、育児の役割分担の実態に関する研究は10件であった。佐藤（2012）は、乳幼児を育てる夫婦では、妻の就業形態により育児の協働及び意識に違いが見られたとし、フルタイムで働く妻を持つ夫は、専業主婦の妻を持つ夫より育児の分担を引き受け、パートタイムで働く妻を持つ夫と専業主婦の妻を持つ夫の間には育児の分担に有意差はみられなかったことを明らかにしている。久保（2017）の研究では、妻が非正規よりも正規雇用の夫の方が、そしてジェンダー平等意識をもっている夫の方が、家事も育児も頻度が高いことが明らかになっている。また、「夫と妻の家事と育児頻度の関係は、食事の後片付けや入浴の世話などの代替えしやすい項目で妻の頻度が低い方が夫の頻度が高い。食事の後片付け、洗濯・衣類の整理などの正規雇用の妻の頻度が低い項目で、その夫の頻度が高い傾向にあり、正規雇用の妻と夫の代替関係が強い傾向。」であることより、家事・育

表1 夫婦の家事、育児の役割分担の実態に関する研究

研究者	論文名	研究方法	目的	対象
久保 (2017)	共働き夫婦の家事・育児分担の実態	質問紙調査	夫の家事、育児分担を促進するための要因を整理し、さらに、家事、育児項目ごとに夫の分担状況を検討する	21公立保育園の保護者で、夫婦とも雇用者が役員の共働きの核家族世帯の夫婦726組
村田 (2015)	家庭生活の満足度は、家事の分担次第? ISSP国際比較調査「家庭と男女の役割」から	質問紙調査	世界各国との比較において日本の男女の家事分担や負担感、さらには家事分担と過程生活の満足度がどうなっているのかを、配偶者と生活している男女にしばって分析する	国際比較調査グループISSPが2012年に実施した調査「家庭と男女の役割」を構成するおよそ60問のうち、夫婦間の役割分担について尋ねたものなど12問(18歳未満の子がいる有偶者男女761人)
田中恵 (2014)	1歳児をもつ子育て初体験夫婦の家族内ケア	質的研究(面接法)	1歳児をもつ子育て初体験夫婦の家族内ケアを明らかにする	1歳児をもつ子育て初体験夫婦10組
佐藤 (2013)	事例分析にみる乳幼児の子育て生活の課題の考察 非就業者の妻とフルタイム就業の夫のカップルの生活時間から	質問紙調査	「非就業の妻とフルタイム就業の夫のカップル」の生活時間事例を取り上げ、対象事例の生活実態の把握と課題の考察を行う	A病院母親学級参加者のうち産後1年未満の初産のカップルのうち、非就業の妻とフルタイム就業の夫の9カップル
佐藤 (2012)	父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動	質問紙調査	母親の就業形態は父親と母親の育児行動と育児感情にどのようなかわりがあるかに焦点を当て、検討する	保育所児の母親が有職の夫婦と、幼稚園児の母親が専業主婦の夫婦を併せた366組
鈴木 (2012)	仕事時間が短くなれば、夫の家事・育児時間は増えるのか: パネルデータからみた夫婦における仕事と家庭の影響関係	質問紙調査	夫婦における仕事時間と家事・育児時間の影響関係についての基礎的な分析を行う	「消費生活に関するパネル調査」においてパネル17~19の3か年に回答した有偶者の女性1098名
小堀 (2010)	子どもを持つ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程	質問紙調査	子どもを持つ正規従業員の共働き夫婦に焦点をあて、彼らが直面しうるWFC場面の調整過程を、発話思考法を用いたプロトコル分析を通して明らかにし、WLBや伝統的性役割観に関する個人の捉え方を考察する	子どもをもつ正規従業員20名(男性8名、女性12名)
安原 (2009)	父親の子育てについての意識と実態についての研究—延岡市を中心に—	質問紙調査	地域の子育てに対する意識と子育て参加の実態を把握することによって、現在、全国一律に展開されている子育て支援の有効性について検討し、地方において必要な支援の在り方を考察する	延岡市を中心とした宮崎県北部地域の公立および民間の保育園10園に通っている保育園児の父親325人
藤生 (2009)	核家族世帯における2歳以下の児をもつ父親・母親の育児機能 家事・育児協力の有無による比較	質問紙調査	家事・育児協力の具体的項目の有無による比較を「育児アセスメントツールII」を用いて育児機能を検討することにより、夫婦の育児協力のあり方について明らかにする	K市373世帯の保育園児をもつ父母のうち、核家族で2歳以下の乳幼児をもつ42世帯
中川 (2009)	共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加	質問紙調査	先行研究にもとづいた夫の育児・家事参加について直接要因と、妻の働きかけを媒介変数とした媒介要因とを検討する	東京都の保育園に子どもが在園している共働き夫婦207組

見の中でも夫が行いやすい種類についても明らかにしている。村田、荒牧(2015)は、家事分担の不公平感が強いと、家庭生活の満足度が低くなることを明らかにしている。夫の育児へのネガティブな語りとして田中(2014)は、夫は妻に対し母子の密着した関係の中に入っていく困難さがあることを明らかにしており、育児を進めていく上で家族の三者間の葛藤が存在することや、妻と子どもとの関係を調整していくことが必要であると述

べている。一方、妻は、夫への役割期待と役割遂行にズレが生じている事や、妻自身にゆとりがない上に母親役割規範を強く内面化している事が影響していると述べている。

2) 父親(夫)を中心とした家事、育児の役割分担に関する研究(表2)

父親(夫)を中心とした家事、育児の役割分担に関する研究は9件であった。父親の家事、育児に対する意識について、鈴木(2013)は、子育て

に参加したいと思っている割合は第1子出生時及び子ども7歳時共に80%以上と高い割合だったが、実際の子育て実施率は意識よりも低い割合だったことや、「家事は女性の仕事だと思う」も第1子出生時、子ども7歳時に59.4%いたとし、現実に父親が参加できる家事内容について、夫婦間での検討が必要であると述べている。

父親役割受容状況に関する研究で、中垣、千葉(2013)は妊娠中に経済的な面での調整や、産後

の家事や育児の調整を行うことは、父親役割の「肯定的な受容」を促進すると考えられるが、経済的支えや家事の手伝いなどを負担に思うことは役割受容に負の影響を与える可能性が考えられ、産後の家事や育児がイメージしづらい父親に対し、子育てをしている夫婦がどのように家事育児を工夫しているかなどの情報提供の支援も必要であると述べている。また、家事や育児への参加が父親自身の生きがいや充実感、生活満足感といった

表2 父親(夫)を中心とした家事、育児の役割分担に関する研究

研究者	論文名	研究方法	目的	対象
加賀美(2017)	父親の家事・育児行動についての認識と評価に関する文献概観	文献研究	父親の家事、育児行動に関する認識や評価についての研究結果を整理し、動向と今後の課題を明らかにする	1995年～2015年までに発表され、CiNiiを用いてキーワード「父親&育児」と「認知」「意識」「評価」「夫婦&育児」と「認識」「意識」で検索し、選択条件にあった19文献
美甘(2016)	生後4か月までの児を持つ父親の育児・家事行動と育児ストレスに関する文献レビュー	文献研究	生後4か月までの児を持つ父親への育児参加の促進を促すために医療者が行う支援を明らかにする	2001年～2016年までに発表され、医中誌Webを用いてキーワード「父親」「育児」「乳児」で検索し、選択条件にあった16文献
川口ら(2016)	産前産後プログラムが父親の育児・家事行動に及ぼす影響—仕事と育児・家事時間の調整に焦点をあてて—	質問紙調査	父親になる男性に対して「仕事時間と育児・家事時間の調整の意義と方法をあてた産前教育プログラム」を実施し、父親の産後の育児・家事行動を増加させ得るかを調査することにより本プログラムの有効性を検証する	福岡県内8か所で実施した産前教育に参加した父親41名
牧田ら(2015)	妊娠期における夫(パートナー)の家事協力と対児感情	質問紙調査	夫(パートナー)の家事協力の程度と対児感情についての関連性について検討する	A病院の両親学級を受講した妊婦とその夫(パートナー)のペア48組
澤岨ら(2014)	乳幼児をもつ父親の家事・育児への意識と役割行動	質問紙調査	B市の父親の家事・育児参加への父親役割に対する父親の意識や役割行動の実態を明らかにし、父親に対しての保健指導や教室などに役立てる	B市在住の保育園に通う、0歳から6歳までの乳幼児をもつ父親66名
高城ら(2013)	乳幼児をもつ父親のQuality of lifeと構造的にみた関連要因	質問紙調査	乳幼児を育てる父親のQOLと関連する要因と、その関連要因について構造的に明らかにする	第3回全国家族調査の若年調査対象者のうち、0～5歳の子どもをもつ男性290人
中垣ら(2013)	生後3～4か月児の父親の父親役割受容状況に関連する要因：産後の家事・育児についての妊娠中からの夫婦間での調整の観点から	質問紙調査	生後3～4か月児の父親の父親役割受容の状況と、妻の妊娠中に産後の家事や育児に関して夫婦間で調整した内容や、出産の満足度、家事の負担、育児の負担などの関連性を検討し、父親の父親役割受容の支援のための示唆を得る	3・4か月健診を受けた乳児の父親65名
鈴木ら(2013)	父親の子育てに関する意識 出生時と7年後の比較	質問紙調査	第1子出産時と7年経過した時点での父親の子育てに対する意識と実態について明らかにする	A市の小学1年生の子をもつ父親59名
大野(2012)	育児期男性にとっての家族関与の意味：男性の生活スタイルの多様化に着目して	質問紙調査	夫婦間での職業役割と家庭役割の分担のしかたが彼らの生き方満足度にどのように影響するかを検討し、男性にとっての家庭関与の意味を再考する	神奈川県および愛知県内の幼稚園・保育園に通う3～4歳児を持つ育児期夫婦332組

QOL との関連要因について高城, 星 (2014) は, 父親が家事育児役割を担うことと父親の QOL は統計学上有意な関連は見られなかったことを明らかにしている。しかし, 夫婦の満足度を高めるような夫婦の関係性が基盤となり, それが QOL を高める可能性があるとして述べており, 配偶者の情緒的サポートが夫婦の関係性を高めるために重要であるとしている。

妊娠中の妻を持つ夫を対象に, 産後まで継続して行っている研究では, 川口ら (2016) や牧田ら (2015) がある。川口ら (2016) の研究においては, 妊娠中に「仕事時間と育児・家事時間の調整の意義と方法に焦点をあてた産前教育プログラム」を実施し, 家事・育児関与への意識や行動の変化について評価している。プログラムによって意識は実施前と比べて高くなっていたが, 産後の行動の変化はみられず, その原因として性役割分業観のみにとどまらず, 職場の認識や職場風土も関連していることを明らかにしている。父親は「育児・家事時間の調整のための具体的な工夫」を実施しているが, その内容は父親自身の意識や努力で達成できるものが多く, 職場の仲間に協力を依頼したり, 周囲に自身の子育ての状況を表出したりして理解をもとめるような項目については実施率が低かった」ことを明らかにしている。産前教育プログラムにおいて, 父親としての先輩からのレクチャーはピアとしての一定の効果があつたとしており, 職場での協力依頼についての経験談など, 周囲に理解してもらい協力を得たうえで家事, 育児行動実施への行動変容につながる産前教育を,

今後も考えていく必要がある。

3) 母親(妻)を中心とした家事, 育児の役割分担に関する研究 (表3)

母親(妻)を中心とした家事, 育児の役割分担に関する研究は4件であった。久保(2016)は, 「家事・育児分担の男女の不均衡に対して, 不公平感を持つ妻もいるものの, 他方, 不公平感を感じない妻もいることが, 家事・育児分担研究の論点の一つとなっている」と述べており, 妻のジェンダー意識である「男性の育児参加を支持する妻の意識」が高い場合は, 妻の評価が低く, 「ジェンダー理論」が支持されたことを明らかにしている。また, 田中(2010)は, 「父親が夫婦関係に満足し, 自分はよく育児家事をしていると思っているほど, 母親は父親の育児家事行動に満足している傾向が強い」「母親が父親の育児家事に満足しているほど, 母親の育児ストレスは少ない」ことを明らかにしている。これは, 夫が実際に何をやるかではなく, 夫が家事育児という仕事を大変と思ひ, 夫なりに頑張っている自分たちの夫婦関係が良いと思ひっていると, 母親の満足度が高くなり, 母親が安定した心理状態で育児を行えるということを示唆していると述べている。また, 山口ら(2014)は, 母親の育児の苦勞をねぎらったり, 心配事の相談にのったりすることや母親を気づかうなどの情緒的支援行動を父親がよくするほど, 母親の育児負担は少ないことを明らかにしており, 母親を支える父親の育児行動として, 母親への情緒的支援行動を促進させることの重要性について述べている。

表3 母親(妻)を中心とした家事, 育児の役割分担に関する研究

研究者	論文名	研究方法	目的	対象
久保 (2016)	共働き夫婦における夫の家事・育児参加に対する妻の評価	質問紙調査	家事, 育児分担への妻の評価に影響する因子について重回帰分析によって確認する	夫婦とも雇用者か役員の共働きの核家族世帯で, 夫婦ともに回答のある727組
山口ら (2014)	未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連	質問紙調査	未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連を検討する	全国の保育所から無作為抽出した43施設に通所する0~6歳の子供をもつ両親1115組
田中慶 (2014)	夫の家事・育児と妻の夫婦関係評価	質問紙調査	夫の家事・育児時間の変化を捉え, 3種類の夫婦関係の「質」に関する指標によって, 妻の評価への影響を測定する	有配偶で核家族世帯の妻809人
田中 (2010)	父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性	質問紙調査	父親の育児家事行動・夫婦関係満足に着目し, 出産後早期と6か月の比較により, その実態を把握し, さらに6か月の母親の育児ストレスと6か月時点の夫婦の要因との関連について検討する	初めての子供をもつ両親で, 0か月と6か月の調査協力で同意が得られた両親73組146人

IV. 考 察

1. 夫婦の家事、育児の役割分担について

夫婦の家事、育児参加を考えると、単純に夫の参加時間数の増加を望むだけでは不十分であり、それぞれの家庭で母親がそれをどうとらえ、評価するかが重要である。そのため、母親側からの思いの傾聴や評価に関する研究を今後詳細に行っていくことで、ひいては父親にどのように家事、育児を分担していくかについてのアドバイスにつながるのではないかと考える。久保(2017)は、「食事の準備などの従事する時間に裁量の余地のない家事や、育児のように時間消費的な活動では労働通勤時間の長い夫の頻度が低い傾向にあり、従事する時間に裁量の余地のある家事では影響がない」ことを明らかにしている。夫の、家事、育児に参加しようとする意識の改善だけでは、時間の決まっている食事の準備などの家事や、育児の夫の参加頻度が増加しないと考えられる。育児、家事全般について父親としてもっと参加すべきという働きかけだけではなく、どの家事、育児が実際に参しやすいのかという視点で夫婦の話し合いが持てるよう支援する必要があると考える。

夫の労働時間に加え、妻の就業形態によって、夫の育児の協同及び意識に違いがみられるが、夫の家事時間については妻の就業形態によって違いがみられなかった(佐藤, 2012)。夫婦共働きの家庭においては、妻の方が夫婦で平等に家事を担うことを支持する傾向にあるとされており、育児は行っても夫の家事の時間が変化しないことは家事負担に対する不公平感を生んでいることが考えられる。育児だけでなく、家事も育児支援の一つとして意識していくことも必要だろう。

父親を中心とした家事、育児に関する研究では、家事育児を行うことによるQOLとの関連や、実際の家事育児時間に加え、意識を調査したものが多くみられる。父親が家事、育児へ参画することで、父親や自身の成長やQOLの向上につながれば、負担感ばかりが先行せず、家事、育児分担がスムーズに行えるのではないかと考える。寺見、南(2017)は、父親の労働時間が変化していない中で家事、育児に参画していくことは、かかわりの質の低下とともに、父親のストレスを高める可能性があることを指摘し、限られた時間の中の質の高いかかわりを確保することと、父親が父とし

ての子どもへの親和性や自律性を確保していくことを考慮にいたした支援の必要性があると述べている。父親の家事、育児参加が個人の価値観や意識だけでなく労働条件、職場風土などにも関係しているのであれば、仕事と家庭生活を両立させるためのワーク・ライフバランスを推進する制度が企業等で運用されているが、現状では女性が利用することが圧倒的に多いため、父親のワーク・ライフバランスについても今後考えていくことが重要である。妊娠期から、継続的に父親も含め親役割を獲得していく夫婦が自立し、お互いを尊重しながら意思決定できるような支援について、今後も研究を深めていくべきであると考えられる。

2. 今後の課題

今後の課題として、一般的な家事、育児の実施状況にとどまらず、先行研究で明らかになっている就労状況や夫婦関係、家事、育児に対する意識などの関連要因について詳細な研究を進めていく必要があると考える。久保(2017)では労働者が日々の生活時間の配分の自律性を高められるための方策が必要であると述べており、父親自身では解決できない問題について今後も明らかにしていく必要がある。また、村田(2015)は、多くの日本人の間で共有されている「家事や育児は男女で分担すべき」という意識と、家庭内の実際の役割分担がかい離しているため、依然として多くの家事を担っている女性で不公平感を抱く人が多数に上がっており、家事分担をめぐる男性の意識と行動のかい離についての考察が今後の課題としている。家事、育児分担の現状や父親の意識については一定の研究成果があるため、その現状の詳細な分析が今後必要となる。その際、夫と妻の自己評価・他者評価の違いがある可能性もあり、夫婦両方からの視点での研究を行っていくことで、夫婦間の相互評価の相違をなくしていく必要がある。また、複数の研究は横断研究であるが、家族としての発達段階や、育児の段階によっても家事、育児の役割分担は変化することが考えられることから、縦断調査も必要となってくると考える。

V. 結 論

1. 抽出された文献は、夫婦の家事、育児の役割分担の実態に関する研究、父親(夫)を中心と

した家事、育児の役割分担に関する研究、母親(妻)を中心とした家事、育児の役割分担に関する研究の3つに分類された。

2. 育児、家事全般について父親としてもっと参加すべきという働きかけだけではなく、どの家事、育児が実際に参加しやすいのかという視点で夫婦の話し合いが持てるよう支援する必要がある。
3. 家事、育児分担の現状や父親の意識については一定の研究成果があるため、その現状の詳細な分析が今後必要である。その際、夫婦両方からの視点での研究を行っていくことで、夫婦間の相互評価の相違をなくしていく必要がある。

文 献

- 第5回全国家庭動向調査 現代日本の家族変動, 国立社会保障・人口問題研究所 (2013年社会保障・人口問題基本調査) <http://www.go.jp/ps-katei/j/NSFJ5/Mhoukoku/Mhoukoku.sap> [検索日2018年9月10日]
- 藤生君江, 吉川一枝, 神庭純子, 他. (2009): 核家族世帯における2歳以下の児をもつ父親・母親の育児機能 家事・育児協力の有無による比較, 岐阜医療科学大学紀要, 3, 195-202.
- 加賀美春香. (2017): 父親の家事・育児行動についての認識と評価に関する文献概観, 生涯発達心理学研究, 9, 73-78.
- 川口弥恵子, 松原まなみ, 井口亜由, 他 (2016): 産前産後プログラムが父親の育児・家事行動に及ぼす影響—仕事と育児・家事時間の調整に焦点をあてて—, 聖マリア学院大学紀要, 7, 3-15.
- 小堀彩子. (2010): 子どもを持つ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程, 心理学研究, 81 (3), 193-200.
- 久保佳子. (2017): 共働き夫婦の家事・育児分担の実態, 日本労働研究雑誌, 59 (12), 17-27.
- 久保佳子. (2016): 共働き夫婦における夫の家事・育児参加に対する妻の評価, 日本家政学会誌, 67 (8), 447-454.
- 牧田かな, 牛島倫, 岡奈央子, 他. (2015): 妊娠期における夫(パートナー)の家事協力と対児感情, 大阪母性衛生学会雑誌, 51 (1), 44-53.
- 美甘祥子. (2017): 生後4か月までの児を持つ父親の育児・家事行動と育児ストレスに関する文献レビュー, インターナショナル NursingCareReserchi, 15 (4), 143-151.
- 村田ひろ子, 荒牧央. (2015): 家庭生活の満足度は、家事の分担次第? : ISSP 国際比較調査「家庭と男女の役割」から, 放送研究と調査, 65 (12), 8-20.
- 内閣府. (2018): 女性活躍加速のための重要方針2018, <http://www.gender.go.jp/jyuten2018-honbun> [検索日2018年9月8日]
- 内閣府. (2012): 平成24年版子ども・子育て白書, 142-143, 勝美印刷, 東京.
- 中垣明美, 千葉朝子. (2013): 生後3~4か月児の父親の父親役割受容状況に関連する要因 産後の家事・育児についての妊娠中からの夫婦間での調整の観点から, 日本看護医療学会雑誌, 15 (1), 35-42.
- 中川まり. (2009): 共働き夫婦における妻の働きかけと夫の育児・家事参加, 人間文化創成科学論叢, 12, 305-313.
- 大野洋子. (2012): 育児期男性にとっての家族関与の意味: 男性の生活スタイルの多様化に着目して, 発達心理学研究, 23 (3), 287-297.
- 佐藤千晶. (2013): 事例分析にみる乳幼児の子育て生活の課題の考察 非就業者の妻とフルタイム就業の夫のカップルの生活時間から, 上智社会福祉専門学校紀要, 8, 13-25.
- 佐藤淑子. (2012): 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動, 鎌倉女子大紀要, 19, 25-35.
- 澤岬千晶, 小西清美, 長嶺絵里子, 他. (2015): 乳幼児をもつ父親の家事・育児への意識と役割行動, 沖繩の小児保健, 41, 45-48.
- 鈴木紀子, 清水三紀子, 藤原郁, 他. (2013): 父親の子育てに関する意識 出生時と7年後の比較, 愛知母性衛生学会誌, 30, 35-42.
- 鈴木登美子. (2012): 仕事時間が短くなれば, 夫の家事・育児時間は増えるのか パネルデータからみた夫婦における仕事と家庭の影響関係, 家計経済研究, 96, 35-46.
- 高城智圭, 星且二. (2013): 乳幼児をもつ父親の Quality of life と構造的にみた関連要因, 社会医学研究, 31 (1), 87-94.
- 田中恵子. (2015): 1歳児をもつ子育て初体験夫婦の家族内ケア, 母性衛生, 55 (2), 317-324.
- 田中慶子. (2014): 夫の家事・育児と妻の夫婦関係評価, 家計経済研究, 104, 23-33.
- 田中恵子. (2010): 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性, 人間

文化研究科年報, 25, 125-134.

寺見陽子, 南憲治. (2017) : 父親の家事・育児意識と行動変容とその要因に関連する研究—2000年と2010年のデータを比較して—, 神戸松陰女子学院大学研究紀要, 6, 119-135.

山口咲奈枝, 佐藤幸子, 遠藤由美子. (2014) : 未就学児をもつ父親の育児行動と母親の育児負担感との関連, 母性衛生, 55 (4), 495-503.

安原青兒, 元木久男, 山西裕美. (2009) : 父親の子育てについての意識と実態についての研究—延岡市を中心に—, 九州保健福祉大学研究紀要, 10, 111-120.